いる「戦後の医療史」などは特に興味深く読ませて頂いた。

Ⅲ部の各論文は、『沖縄という特殊性』のテーマが十分吟味されていて、精神医療、ハンセン病対策、マラリア、腸管寄生虫対策、歯科医療の各論は、それぞれ発生と蔓延、医療と対策について、沖縄という地域の立地条件や気候など環境との関わり合いを示しながら簡潔に要領よくまとめてある。「南西諸島人の骨格」と「高嶺徳明と補唇（兎唇）術」に関する考察も興味深い論文である。

一般に複数の執筆者によって上梓されている場合、内容によっては専門の違いもあってか時として違和感を感じさせることがある。本書でも「漢詩文」に馴染みのない者にとっては、なぜ「医療史に漢詩文」なのかと訝る向きもないでもないが、「沖縄（琉球）と中国の文化交流史」は、中国へ留学した琉球人の作品によって沖縄文化の背景を知る手がかりとなり、その点からも編集に大変配慮されている様子が窺われる。

また、本書には所々に「ワンポイントメモ」という欄が設けられている。清涼飲料水的役割を果たしていて、気楽に読めるところがいい。

紙面の都合で言い尽くせなかった歯痒さを感じさせる部分もあるが、いずれの章も簡潔にまとめられており、分かりやすいので、医学を専門としない郷土史研究家の人々にとっても貴重な資料集となるのではないだろうか。なお、蛇足だが、表紙もすっきりして品良く仕上がっている。

（壹岐　裕志）

〔九州大学出版会：〒812-0053福岡市東区箱崎七―一―一四六、電話〇九二―六四一―〇五一五、平成十年三月、B5判二〇六頁、本体四五〇〇円〕

児玉善仁著

『〈病気〉の誕生―近代医療の起源―』

この書を紹介するのに、推奨するか批判するか長い間迷った。その理由は、著者が新しい視点や方法を提示しながら、ヨーロッパのみを考察の対象としているという点で、大きな枠組では、従来の中世史の、やや古い考え方にとどまっているためである。ここでは、著者に対して多少非礼になるかも知れないが、評者が感じたことをそのままのべたい。

イタリア教育史の専門家である著者は、長年の研究の結果を医療に広げ、いくつかの社会文化史上の事象を指標として、医療の中世から近代への転換をとらえようとした。それは単に近代医学の確立という内容ではなく、医療の広い範囲にわたって中世的性格と近代的性格を比較しようとするものである。

出発点となったのは、治療契約という慣習であった。著者は、教育における教授契約と比較しながら、この慣習の背後にある観念を検討し、医師に対して治癒を要求するということが中世的心性であるとした。医学の変貌にしたがって、治癒でなく診療を対象として報酬が支払われるようになり、これが医師・患者関係の近代的あらわれであるとする。

著者は治療契約と共に、次のような諸要因を指標として取り上げ、分析している。(1)修道院医療と世俗的医療、あるいは慈善と経済的行為、(2)医学教育の徒弟制と学校制、あるいは経験医と大学出の医師、(3)医師の勤務形態、雇い主、(4)技術としての医術と学問としての医学、(5)病気のイメージ、中世的病気観と近代的病気観、(6)診療報酬の理解、(7)学位制度の理解、(8)専門職としての医師の出現、(9)医師組合の成立、(10)近代的病院の成立など。

これらの項目を見ても、いかに著者が広い観点から医療を見ているか明らかであろう。著者は、これらの問題を取り上げるについて多くの医史学の文献を読破しており、その勉強ぶりは、不勉強な評者を恥じ入らせたほどである。

とくに興味深いのは、著者が長年蓄積して来た豊富な史実であった。イタリアを舞台とした医療・医学の状況は非常に詳しく、この面だけでも一読に値する。たとえば医学教育を取り上げた部分なども、記載が極めて詳細で、論証も精密である。これは評者の個人的な好みだが、地名を聞くとエステ家やルクレチア・ボルジアを思い出すフェラーラの大学が、学位取得の容易な大学として有名だったということなど、非常に面白かった。

だが著者の視線は常にヨーロッパに限られており、そこに評者はこの書の限界を感じた。今、西洋中世史あるいは西洋中世医学史(ここでいう西洋は、中国を中心とした文化圏=東洋に対するもので、ヨーロッパ人のいうオクシデントではない)を考える場合、ヨーロッパだけでなく、イスラム世界、ビザンチン、ユダヤ民族などを含めて考えることが必要である。著者は、病院が一五、六世紀のイタリアで生まれたとしているが、近代的病院はアラブ医学で生まれたものであり、そのことを無視した病院史はありえない。アベロエスの思想もヨーロッパ人の見た観点からのみ取り上げられているが、マリク派法学者としてイスラム世界に大きな影響を及ぼしたアベロエスが、後に異端を疑われ投獄された全生涯と、イスラム世界におけるその思想の意義とを知らなければ理解は完全といえない筈である。著者が中世の特徴とする医学と宗教の相克についても、ムハンマドは医学を神学とならぶものとしており、アラブの医師たちはヨーロッパの医師たちよりはるかに自由であった。

著者はイタリアの先進性を強調するが、医学・科学の真の近代化は、ローマ教会の呪縛からの解放、すなわち宗教改革を待ってはじめて可能であった。評者は、ガリレオの異端審問が、中世とはいえない一七世紀のできごとであったことを指摘したい。

しかしこのようにいろいろの問題があるとしても、医史学研究者がこの著作から示唆を受けることは多い。評者はアラブ医学・ユダヤ医学に関心を持っているためか、前記の傾向が非常に気になって、この書の長所を充分に把握できなかった。多くの医史学研究者がこの書を読み、評者の意見にかかわらず、それぞれがこの書から何かを学ぶことが評者の願い

である。

（泉　彪之助）

〔平凡社：〒152-8601東京都目黒区碑文谷五―一六―一九、電話〇三―五七二一―一二三四、平成十年五月、四六判、二九六頁、本体二二〇〇円〕。

北条元一著『米沢藩医史私撰』

著者は昭和二四年（一九四九）以来、郷里の山形県米沢市で耳鼻科を開業する医師である。繁忙な開業医のかたわら、長年にわたり上杉謙信以来の由緒ある米沢藩の医史を研究している。昭和一一年（一九三六）に東京慈恵会医科大学を卒業後軍医として応召し、シベリア抑留という辛酸をなめて、開業の前年に帰国した。今年八八歳という高齢にもかかわらず、矍鑠としての執筆生活をおくっている篤学の士である。

本書は一九九二年にすでに発行されている。本来ならその期に本欄で取りあげれてしかるべき著書であったのだが、なにかの行違いがあったのであろうか、言及されることなく今日まで時がすぎてしまった。会員の著書でもあり、本書以外に米沢藩の医史をあつかった書物がない現在、放置するに忍びなく新刊とはいいがたい時期ではあるがあえて取りあげた所以である。

米沢藩といえば、だれもが天保期の小児科医堀内素堂を思い浮かべるにちがいない。本書もこの素堂を傑出した医師として家系にもつ、藩医堀内（ほりのうち）氏代々の業績を中核にしてまとめられている。すなわち六六〇頁というこの大冊は五五章にわけられているが、医師としての初代忠哲からはじまり、六代忠亮にいたる一五〇年の蘭方医家堀内氏の歴史が、三四章・四二〇頁におよんでおり、全冊の三分の二をしめている。

堀内氏をかたる上でぜひとも取りあげなければならないのは「堀内文書」であろう。堀内氏の後裔であり、当主にあたる堀内淳一家につたえられた膨大な文書を整理・解読したのが「堀内文書」である。当時の小川鼎三日本医史学会理事長を中心にして文部省科学研究費による「江戸時代後半の蘭方医術の発展に関する研究班」が結成され、この研究班によって解読と内容の検討がおこなわれた。その成果は『日本医史学雑誌』一六巻三号から一二回にわたって連載されていたので、おおくの会員の目にふれたことと思う。

本書においてもこの「堀内文書」を史料として縦横に活用しているが、これにもれたおおくの史料を発掘して追加し、それにもとづいて米沢藩医堀内氏代々の医業を克明にえがくことに成功している。

なかでもその主要部分をしめるのは五代素堂堀内忠竜（忠寛）の業績である。素堂は米沢藩における最もすぐれた蘭学者であった。この藩における蘭学の系譜は堀内氏を中心として興隆したといっても過言ではない。そればかりか西洋小児科医書を最初に和訳した『幼幼精義』の翻訳者であり、歴史に